学校入脈

山崎高校編 ③

アジア報道

使命感抱き現場に立つ

国境線を突破したベトナム軍の銃弾が、ピン、ピーンと耳元をかすめ飛んだ。1980年6月24日、タイ東部。26歳の駆け出しフォトジャーナリストだった野中章弘(65)＝山高24回、アジアプレス・インターナショナル（API）代表＝は、初めての戦場取材にも頭は冷静だった。

沢田教一や一ノ瀬泰造が撮ったベトナム戦争の報道写真と同じだと思った。燃え上がる難民村にタイ軍兵士が身を伏せて銃を向ける様子を立ち上がって撮影した。戦車壕の水たまりの死体にも構図を考えてカメラを向けた。恐怖で顔が引きつったが「俺はプロだ」と言い聞かせた。写真は朝日新聞の1面に署名入りで載り、名前が知られるようになった。

野中がフリーの記者を志したのは関西学院大3年の時。新聞部顧問の評論家とタイ、インドネシアの学生運動家らを訪ね、アジアを自由に報道したいと思った。タイの後もアフガニスタンに潜入し、ソ連軍の支配に抵抗するゲリラの将軍などを取材した。だが1人では長続きしないと考え、87年にフリー記者のネットワーク組織、APIを設立した。

2003年のイラク戦争では日本の報道機関がバグダッドから撤退する中、「市民の側からの報道が必要」と判断。APIで育てた綿井健陽をイラクに送り、野中は東京で民放各局と映像提供の交渉に当たった。

バグダッドが陥落しフセイン元大統領の像が引き倒されると、一部の全国紙は米国のテレビ映像を見ながら「解放を喜ぶ市民」と書いた。だが綿井は米テレビクルーの前で数十人が喜ぶだけの様子をリポート。米軍が操作する「正義の戦争」報道と一線を画した取材は高く評価され、業界関係者が選ぶ04年の「放送人グランプリ特別賞」を受賞した。

「日本が関わる戦争で起きていることを国民は知り、判断する必要がある。その材料を提供するのがジャーナリスト。危険でも行くべき場所には行く」。戦場取材への逆風が強まる昨今、報道の意義を説明する。

民主化運動が武力鎮圧された天安門事件（1989年）前後の中国を取材した元共同通信記者の高田智之(72)＝山高18回＝もまた「現場が基本」と強調する。高田は野中と同じ姫路市安富町安志出身。中国では当局の監視をかいくぐり、同事件に関連して拘束を解かれたばかりの民主派評論家などを取材した。

「後で当局にばれて警告を受けても、意を尽くせば信頼関係が生まれる。互いに人間。考えを主張し、分かり合うことが大切」と語る。

共同通信を退職後、中国の知人から国営新華社通信の日本語ニュースサイトのデスクを頼まれた。現地の若い記者に日本の報道機関が培った記事の書き方を教えている。「中国は永遠の隣国。複眼的な情報が相互理解を深める材料になれば」と願う。

野中も早稲田大の教授に招かれ、同大ジャーナリズム研究所長に就任した。新聞、テレビ業界に就職した教え子は80人を超える。「記者に必要なのは権力の監視と弱者の視点。その精神を持つ若者が100人を超えれば日本の報道は内側から変わる」。アジアの底辺で社会の矛盾と向き合った精神は次の世代に引き継がれている。

＝敬称略＝

（古根川淳也）

早稲田大で学生にジャーナリズムを教える野中（中央）＝東京都新宿区、同大学

天安門事件の前後に共同通信社の北京特派員、上海支局長を務めた高田＝宍粟市山崎町